ブラジル日系移民研究における
榆木久一資料の重要性に関する一考察
―サンパウロ人文科学研究所所蔵の新資料を踏まえて―

長尾　直洋*

1．勝ち負け抗争について

1908 年の笠戸丸移民以降、戦前に約 19 万人の日本人が移民としてブラジルへ渡った。奴隷制の廃止後、主に欧州移民を働き手としていたサンパウロ州のコーヒー農園の新たな労働力としてブラジルへ渡った日本人移民は、後には米や綿花等、様々な農作物の栽培に従事し、また一部の人々はサンパウロ市等の都市圏へ移動し、様々な職種についた。先行するハワイ移民等と同様、当初は出稼ぎ目的で数年間の労働の後、錦衣帰国を目指していた日本人移民であったが、数年での蓄財が難しいことを知ると、来る帰国の日に向けて、同行した子弟や現地生まれの子どもへ日本的な思想・言語教育を施した。

耕地での過酷な労働、マラリア等の跋扈する劣悪な衛生状況等、様々な困難に見舞われつつも、錦衣帰国のために奮闘していた日本人移民であったが、1930 年代以降は、ブラジル国内における同化主義的な新国家体制、そして第二次世界大戦の勃発により、新来移民数の制限や日本語使用の禁止、また子弟への日本語教育の制限等、非常に厳しい環境に置かれることとなった。

元々出稼ぎ目的であった日本人移民の大半は、ポルトガル語をほとんど理解出来なかったため、戦争に関する母国の情報は、日本からの短波ラジオによる大本営発表等の限られた情報源に頼るほかなかった。そのため、1945 年 8 月の終戦についても、日本の敗戦を即座に理解した人々はほんの僅かであり、祖国の敗戦を信じられなかった大半の日本人移民は、戦後暫くの間、日本の勝利を信じ、そして喧伝した[1]。日本の勝利を信じた勝ち組の一部は、日本の敗戦を認識し宣伝する負け組の行動に異を唱え、その「非国民」的な行動に対して、暗殺というテロ行為で応じた。ブラジル官憲はこのテロ行為を、当時の代表的な勝ち組組織「臣道連盟」の主導によるものと考え、同組織の関係者を大量

＊　人間科学総合研究所客員研究員

1　斎藤広志は泉靖一の編著（泉 1957）のデータを元に当時の邦人社会における勝ち組負け組の割合について紹介している。当時「認識派」は戦後一週間以内に日本の敗戦を知った人々で、邦人社会の 14% 程度の少数であった。一方、戦勝派は二つに分れ、「狂信派」は 1953 年 2 月時点でなお日本の敗戦を信じないもしくは勝利を信じる人々で全体の 26%、「強硬派」と呼ばれる人々は、終戦後しばらくは戦勝を信じたもののその後疑いを持った人々で、約 60% を占めており、認識派・狂信派双方と一定の距離を置いたとされる（斎藤 1960：241）。

に検挙し、投獄した。同時期には、帰国詐欺や円売り事件等、勝ち組を狙った詐欺事件も横行し、ブラジル邦人社会は混乱を極めた。ブラジルの邦人社会を二分した勝ち負け抗争は、戦後約10年間に渡って続いたが、1954年のサンパウロ市400周年記念祭への参加をきっかけに邦人社会が再統合へと向かっていったことで、一応の収束を見た[2]。

新聞、文学作品やルポルタージュ、研究論文等、勝ち負け抗争に関する記述は枚挙に暇がない[3]。日本の著述家によるものだけを見ても、勝ち組側によってブラジルに招待された後、負け組側に近づきつつ、双方の関係者への取材を行った上で、勝ち組を狂信者として描いた高木（1970）、勝ち組を、戦前日本の精神を維持し続けた人々として肯定的に描いた藤崎（1974）、母国とブラジルのナショナリズムの間で翻弄された犠牲者として勝ち組を捉えた田宮（1975）、勝ち組負け組双方の意見を取り入れ、事件を中立的に描いた太田（1995）など、様々な著作が存在している。

当時のブラジル社会に大きな衝撃を与えた勝ち負け抗争は、学術的にも重要なトピックとして扱われた。抗争の余波が未だ燻っていた1948年にMario Botelho de Mirandaが、また1949年にはAlexandre Fernandesが臣道連盟に関する研究を発表している。前者はサンパウロ州社会政治警察（DOPS）の通訳時に得た資料や知識を元に、臣道連盟の組織や活動について述べた上で彼らを狂信者扱いしているが、後者はそうした視点を払拭すべく、ブラジルにおける日本人移民の役割を、ヨーロッパ移民との比較によって、社会学的視点から論じている（Miranda 1948；Fernandes 1949）。また、文化人類学的な視点からの研究もなされており、例えばWillemsとSaitoは、勝ち負け抗争を、ジェトゥリオ・ヴァルガス大統領の国家主義政策に対するカルチャーショックとして説明している（Willems e Saito 1947）。画家であり移民史家でもあった半田知雄は、被支配者層の勝ち組による支配者層の負け組への階級闘争、または戦前の国粋主義を保った勝ち組による民主主義・自由主義を標榜する負け組への思想的闘争といった同抗争への諸解釈について紹介した（半田 1970）。また、KumasakaとSaitoは、同抗争について日本人移民のブラジルへの同化を促進したという肯定的側面を指摘している（Kumasaka e Saito 1973）。三田千代子は、同抗争を邦人社会の社会制度と文化目標の矛盾から来るアノミーの現れであるとした（三田 1978；2009）。前山隆は、勝ち組の運動を、千年王国論的な性格を濃厚にもった日本回帰運動の一形態と捉え、その運動は単なる狂信でも適応失敗でもない、マイノリティによる自発的積極的な「不適応」の選択であったと論じた（前山 1982：179, 237）。また同氏による、ブラジルの日本移民が母国の敗戦をどのように捉え、それがその後のアイデンティティ構築にどう作用したかについて、負け組による敗戦認識運動に焦点を当てて論じた別の論考では、シンドウとウラシンドウというキーワードを用いて、負け組と勝ち組の思考と発想の様式はそれほど隔たった

---

[2] 本稿にて扱う日系移民史については、『ブラジル日本移民八十年史』（ブラジル日本移民80年史編纂委員会 1991）を参考にした。

[3] 同抗争を巡っては、勝ち負けをはっきりさせないことで勝ち負け両派の支持を得ようとしたサンパウロ新聞、負け組側に立ったパウリスタ新聞、そして勝ち組側に立ったブラジル時報、昭和新聞、ブラジル中外新聞等、様々な立場からの報道がなされている（ブラジル日本移民百周年記念協会 2010：124-141）。また、勝ち組向けの機関誌として、『輝號』や『臣道』等があった（輝社 1948；臣道連盟 1946）。

ものではないとしている（前山 1996：267-268）。近年では、2000 年に非日系の Fernando Morais による臣道連盟をモチーフとした歴史物語 Corações Sujos（Morais 2000）が出版されたことで、日系非日系を問わずブラジル人たちが勝ち負け抗争について再認識することになった。その効果もあってか、若い世代による新たな研究が見られるようになった[4]。

このように、最初期から現在まで、著述家や研究者達によって様々な視点から同抗争は検討されてきたのであるが、ブラジル日系社会における同抗争の公的位置づけは、負け組による時局認識運動に始まり、宮尾進による『ブラジル日本移民八十年史』『臣道連盟』によって決定づけられたといえる（ブラジル日本移民 80 年史編纂委員会 前掲書；宮尾 2003）。これらの著作は、サンパウロ州社会政治警察（DOPS）の調書といった公的文書を論拠に置き、「負け組」「認識派」の観点から同抗争について説明を行っている。公的文書という「客観的」資料に基づいた認識派寄りの解釈は、従来の移民史における「正史」として扱われ、負け組は現実を正しく認識した人々、そして勝ち組は現実を正しく認識できない狂信者、すなわち＜負け組＝善／勝ち組＝悪＞という構図が同事件における基本的な解釈として提供されて来たのであった。

一方で、残存する勝ち組の人々は、負け組の歴史認識に対して反発を示している。例えば、母国愛を貫いた勝ち組の大量投獄に対する謝罪をブラジル政府へ要求し、また負け組による円売り詐欺を糾弾した玉井禮一郎や猪股嘉雄による著作（玉井 1984；猪股 1985）、玉井・猪股両氏と最初は協調していたが、その後袂を分かち、両者の論の不備を突きつつも、円売り詐欺等を負け組による犯罪として糾弾した星野豊作による著述（星野 1990）、また最近ではテロ行為と臣道連盟との関係に疑問符を提示した外山脩による作品（外山 2006）など、勝ち負け抗争の解釈について勝ち組側からの主張が行われている[5]。日本における週刊誌等でも、勝ち負け抗争に関する記事がしばしば紙面を飾ったが、それらの内容は狂信者的な観点からのものもあるが[6]、どちらかといえば勝ち組寄りのものが多いように見える（小出 1951；江口 1968；佐藤 1998 a，b，c；1999 a，b）。

2．「勝ち組」楡木久一

本稿の主考察対象である資料群を蒐集した楡木久一氏は、前述した勝ち組の論客たちのように自身

4　例えば Alberto Hikaru Shintani は、勝ち組の発生を、1930 年代のブラジル国粋主義・真珠湾攻撃以後の日本戦争プロパガンダ・移民の祖国日本への意識から生まれた不可避の結果としている（Shintani 2013）。同著には勝ち負け抗争に関する最近までの諸著作のレビューがあり、特にブラジルにおける近年の研究動向を知ることが出来る（ibid., 14-18）。それらの中で、Jouji Nakadate の論文は、勝ち負け抗争の当事者たちの証言がポルトガル語にて記録されており、資料としても貴重なものとなっている（Nakadate 1988）。

5　これらの主張に対しては反論も多い。例えばコロニア作家の醍醐麻沙夫は、テロの実行者と臣道連盟との資金的繋がりを指摘している（醍醐 1981：172）。

6　大城立裕は、基本的には当時未だに勝ち組であった人々の現実認識の遅れを指摘している（大城 1974：108-111）。また、同記事の後半部では沖縄系移民の勝ち組の多さに関する独自の視点を披露している（同書 111-115）。なお、沖縄系移民で、訪日後も勝ち組の姿勢を貫いた比嘉栄一に関して、その訪日を取材した『週刊文春』は同氏をやや狂信的な存在として描いている（週刊文春 1973）。一方で、同じく取材を行った『日本乃日本人』は、同氏の姿勢をかつての日本精神の美として肯定的に捉えている（比嘉 1974）。

の著作や意見を積極的には外部へ発信しなかったが、戦後も勝ち組であり続けた数少ない一人であった。同氏の蒐集資料は、研究者や勝ち組の復権を図る人々にとって、重要な情報源とされた[7]。例えば前山氏は、時期の確定が難しい戦勝デマに関する諸資料の中で、日付入りで冷静な描写を行う楡木氏の日誌を分析の際の主な資料として扱っている（前山 1982：189-197）。また玉井氏は猪股氏との往復書簡において、当時の在サンパウロ邦人の動向等を知るための資料として、楡木資料に第一級の評価を与えている（玉井 前掲書：29-30）。また、玉井・猪股両氏と袂を分けた星野氏も同資料を一級品としている（星野 前掲書：279）。

ここで楡木氏の略歴について触れておく。楡木氏は、1906年生まれで栃木県出身、中等教育を経た後、労働運動に参加していたが、弾圧に遭い、その後信濃海外移住組合の周旋で、1931年10月にぶえのすあいれす丸で渡伯した。サンパウロに居住し、行商、飲食店、洋服の修繕等に従事した、「勝ち組」の戦前移民であり、1986年10月に80才で亡くなった[8]。

楡木氏は、勝ち負け抗争の当初から勝ち組の中心的人物であったわけではない。彼がその晩年において注目されたのは、その日誌及び図書・雑誌のコレクションによってであった。戦時中、ポルトガル語を解した楡木氏は、発行が中止されるまでの邦字紙、そしてポルトガル語紙を読み、スクラップし、また様々な事柄について日誌に記した。戦後も、勝ち組の立場から、同様に日誌を書き、スクラップを集め、資料群を形成していった。

楡木氏の資料が脚光を浴びた最大の理由は、日本の国立国会図書館が彼のコレクションに関心を抱いたことにある。国立国会図書館との交渉の結果、1981年1月には、図書・雑誌類、そして1938年11月分～1964年12月分までの日誌が楡木氏によって売却され、現在は国立国会図書館四階の憲政資料室に所蔵されている。

3．楡木久一蒐集の資料群

3－1．国立国会図書館所蔵分

筆者は、2014年12月から2015年2月にかけて、断続的に約一週間、国立国会図書館所蔵の楡木久一蒐集資料の調査を行った。同資料は、同氏から買い取った書籍類、そして国立国会図書館にて131までの番号が振られた日誌等から成っている。日誌等の大まかな分類と内容は本稿末に記載している。

これらの資料の中で、特に重要と思われるのは、Ⅰの1-21の日誌である。各日誌には、昭和13

[7] 勝ち組関連の資料について、本発表にて扱う楡木資料のような、長年に渡って書き溜められた文字資料は他にほとんど存在していない。しかしながら、近年の傾向として、元特行隊の日高徳一等、勝ち組もしくは関連する事件に関わった人々のインタビューがしばしば行われるようになっており、その多くは音声資料として公開されるか（松本 2006；丸山 2006；山下 2008；日高 2011）、もしくは文字起こしの後に文章で紹介されている（外山 前掲書；三山 2008）。但し、他の裏付けなしに当事者の肉声をもって「客観的な事実」と位置付ける研究（諏訪 2010）が散見されるため、これらの資料の扱いには十分な注意が必要である。

[8] 楡木氏の経歴については、国立国会図書館の『楡木久一関係資料』ホームページの紹介文、前山（1982：190）、星野（前掲書：同頁）を参考にした。

年から16年までの戦争に関する情報、また昭和16年から17年における邦字紙禁止、そしてポルトガル語新聞やアルゼンチンの邦字紙からの情報収集等が記されている。但し、これらの日誌内には、後から編集したと思われる形跡が見られるので注意が必要である。例えば、当時流布していた日本軍の動向に関するニュースが書かれたページの余白に、デマニュースがこの頃より出始めた、といった過去から俯瞰した感想めいた書き込みがなされている[9]。そのほか、昭和18年から19年の日誌ではポルトガル語新聞等のニュースをデマばかりとしている。終戦直前から直後の日誌では、日本敗戦情報到達直後のブラジル邦人社会の動揺と、勝ち組発生の端緒についての重要な描写が見られる。その後の日誌では、勝ち負け抗争に関する話が幾つも綴られているが、日本からの戦後移住が本格的に開始された1953年の日誌では、日本の敗戦を認識済みであることが示されている。

国立国会図書館に売却された日誌は、昭和13年（1938年）から1964年までであるが、新聞や雑誌等の切り抜きに関しては資料売却直前の1980年までのものが所収されている。これらの資料については、勝ち負け抗争に直接関係しないものも多く、中でもブラジルのインディオ（先住民）に関して多くの情報が蒐集されていることが一つの特徴として挙げられる。

3－2．サンパウロ人文科学研究所所蔵分

楡木氏自身が収集した新聞記事からも読み取れるが、当初は同氏のコレクション全体が段階を経て国立国会図書館へ売却される予定であった。しかしながら、紆余曲折を経て交渉は座礁し、売却は最初の引き渡しのみでその後追加されることはなかった。売却されなかった残りの資料群は、その後、コロニア文学界の重鎮である安良田済[10]の手に渡った[11]。さらに、同資料群は安良田氏宅の倉庫整理の結果、2012年にサンパウロ人文科学研究所へと寄贈され、その後は未分類の状態で所蔵されていた。

筆者は、東洋大学井上円了記念研究助成の研究協力者として、サンパウロ人文科学研究所の許可を得た上で、2014年11月の一か月間、同資料の分類作業を行った。同資料は、段ボール箱4個に分納されており、それらへの調査の結果、国立国会図書館に売却されなかった分の楡木資料の全容が明らかとなった。箱①には95点（元々冊子化された新聞記事等のスクラップがバラバラ状態になっており、箱①のみ点数が多くなっている）、箱②には33点、箱③には11点、箱④には17点の資料が収められている。それらの資料の内訳としては、新聞記事スクラップ（大半はバラバラの記事）が約半

9　デマニュースに関しては、国立国会図書館所蔵の『リンス週報』でも確認することが出来る（臣道連盟リンス支部 1945）。

10　山口県出身、戦時下の日本移民の受難についての著作を持つ。安良田氏は戦後間もない頃、勝ち組によるテロの暗殺リストに載ったこともあり、どちらかといえば負け組寄りの人物であったと考えられる。サンパウロ人文科学研究所所蔵の楡木資料内に、楡木氏から安良田氏へ手紙を送ったと解釈できる書き込みがあり、両氏の間にはある程度の交流があったものと思われる。

11　星野氏によれば、「楡木老は逝去の旬日前、国会図書館納入分のコピー類の他に貴重な全資料を私に提供して逝った」（星野 前掲書：同頁）という。この記述から、国立国会図書館納入分以外の楡木資料が、安良田氏へ渡る前に星野氏へと渡っていたと考えられる。

数、次にスクラップを閉じた冊子（19 点）やノート（8 点）、そして切り抜きを含めた雑誌（15 点）、日誌（14 点）、手紙（4 点）等である。本稿末に、主な資料について列挙している。

日誌については、1962 年から 1967 年、1971 年から 1974 年、1978 年、1980 年から 1984 年までのものに加え、特に仕事関連の、1971 年から 1981 にかけての日記が 2 冊、計 14 冊の存在が確認できた。今回の資料調査では、資料のリスト化が主な作業であったため、これら 14 冊の日誌を逐一精読することは出来なかった。しかしながら、1960 年代の日誌からは、勝ち負け関連の書き込みを幾つか見ることができ、1981 年の日誌では国立国会図書館への自身のコレクションの一部の売却、また前山隆氏とのやり取りに関する記述を確認することができた。

冊子・ノート類についてであるが、これらの資料は、基本的に厚紙を表紙として、中に新聞や雑誌のスクラップを挟み、時折それらへのコメントが余白部分に書き込まれたものである。勝ち負け抗争関連では、終戦直後からのデマニュースに関する蒐集物、楡木氏の読書遍歴、また同抗争についてほとんど触れなかった移民 70 年史への揶揄、そして戦後数十年が過ぎた後における「勝ち組」としての心境等、非常に興味深い資料群となっている。その他に、国立国会図書館への資料群売却に関するいざこざについての記事のまとめもある。このいざこざに関連して、国立国会図書館へ先に売却された、日系アメリカ人関連の資料群に関する記事も幾つか蒐集されている。

手紙に関しては、数は少ないが、重要な内容を含むものがほとんどである。知人宛ての、国立国会図書館へ日記等を売却した等の内容が記されたもの、国立国会図書館と楡木氏との間の往復書簡、また「勝ち組」復権を叫ぶ玉井氏とのやりとりを綴ったもの等が挙げられる。

目録等についても、数は少ないが重要な情報を含んでいる。勝ち負け抗争に関する資料収集のリスト、入獄者名簿、また自身のコレクションについてのリストが存在している。

先に国立国会図書館へ、日誌等と共にかなりの蔵書を売却していたせいか、サンパウロ人文科学研究所所蔵の資料群の中には書籍は少数しかなかった。それらの中で目を引いたのは、当時「勝ち組」側に好意的な見解を示した新聞記者アゴスチンニョ・ロドリーゲス・フィーリョの著作の邦訳『東洋の拓人』であり、本資料群の中に複写物が二冊確認された。

もちろん、資料群のすべてが勝ち負け抗争に関連するものというわけではなく、戦後の日系社会やブラジル社会に関する一般記事や、日本を含めた世界各国の情報についても手広く収集がなされている。中でも、黒人差別に関する運動、また共産主義関連の記事が比較的よく見受けられた。

4．ブラジル日系移民研究における楡木資料の活用に関する一考察

前節にて概観した、国立国会図書館所蔵分とサンパウロ人文科学研究所所蔵分の資料群を見渡すことで、楡木資料の全体像と、そのブラジル日系移民研究における活用の可能性が見えてくる。

国立国会図書館へ売却されて以降、様々な人々が既に参照している戦前から戦後 1960 年代前半までの日誌の価値は、改めて言うまでもない。今回の資料調査によって、この続きである、1960 年代以降の日誌の存在が明らかとなった。残念ながら、今回の調査では分類を主な目的としていたため、

日誌の詳細な分析は行っていないが、概観しただけでも、勝ち組であり続けることの心構えについて触れた箇所、また勝ち負け抗争に関する邦字紙等の記事への書き込み、日系社会分析の第一人者と目された前山氏とのやり取り、そして国立国会図書館への自身のコレクション売却に関する心情等、戦後における勝ち組の思考や行動の一端が浮かび上がってくる。

国立国会図書館、そしてサンパウロ人文科学研究所に所蔵されている楡木氏の日誌は、勝ち組の復権を目指す人々が論拠の一つとした同氏資料の背景を知る上で欠かせないものといえる。さらに、両日誌を追う事で、戦後も勝ち組であり続けた一人の戦前日本人移民のライフヒストリーについて検討することが可能となるであろう[12]。

また、楡木資料の存在は、特に国立国会図書館への資料売却という出来事を通して、勝ち組の集合的記憶の表出を促したという意味で重要である。1950 年代半ばにおける邦人社会の統合以降、ブラジル日系社会において、勝ち負け抗争に関して触れることは一種のタブーとなっていた。負け組側が日系社会の中心となってゆく中で、先に紹介した勝ち組の論客たちは、勝ち組であり続けてはいたが、自身の意見を公に喧伝することは少なかった。しかしながら、楡木氏資料の国立国会図書館への売却という出来事は、こうした状況を変えるきっかけとなった。

資料売却に関連して、サンパウロにおいて国立国会図書館側と勝ち組有志との間で行われた座談会の内容を見ると、勝ち組有志が、祖国日本の国立国会図書館による勝ち組側資料の購入を、祖国による勝ち組側の歴史認識の承認として受け取っていたことが分かる[13]。この出来事に後押しされたのか、楡木資料が国立国会図書館に売却された 1981 年以降、玉井氏や猪股氏の著作の発表や、勝ち負け抗争当時の負け組側の主要人物への暗殺行為に加担した人物による証言などが相次いでなされている[14]。その流れは外山氏による著作や、同氏による邦字紙での連載記事等、現在まで続いている。

勝ち組側の主張が『「勝組」「負組」の実相』として国立国会図書館へ収納されたという事実は、勝ち組側の集合的記憶の顕在化への強力な追い風となったと考えられる。楡木資料が大きな影響を与えた、勝ち組側による移民史の見直しについては、現在も続いている現象であり[15]、また祖国日本の右

12　サンパウロ人文科学研究所での調査中、筆者は同研究所顧問の宮尾進氏へ、楡木氏の資料群に関して質問する機会を得た。その際、宮尾氏は元の日誌を楡木氏本人から見せて貰ったことがあると前置きした上で、各日誌にはかなりの改変の跡が見られる、とコメントしている。したがって、日誌を読み解く際には、日付当時の心情のみではなく、合本された日付における当時の心情に基づいた解釈も加わっている、という可能性をも考慮する必要がある。

13　国立国会図書館職員の三塚俊武氏、井門寛氏と、「勝ち組」有志（楡木久一氏、猪股嘉雄氏、小椋庄五郎氏、杉野房好氏、平野慶治氏、立花シゲトシ氏、二階堂俊氏、山本悟氏、キムラミドリ氏、オノムラエイジ氏、シズカマサハル氏）によって開かれた座談会については、国立国会図書館の憲政資料室所蔵の『座談会　いわゆる「勝組」「負組」の実相と移民関係』を参照した。

14　勝ち組側による主張の顕在化に関するもう一つの大きな出来事として、『ブラジル日本移民 70 年史』（ブラジル日本移民 70 年史編さん委員会 1980）における勝ち負け抗争への沈黙、という事実が挙げられる。

15　2013 年、軍政下ブラジルの人権侵害を調査する真相究明委員会は、戦時下における日系移民迫害への謝罪を行った。この出来事は勝ち組側による日系移民史見直しを後押しするものといえる（ニッケイ新聞 2014 年 3 月 21 日）。

傾化との連動を見せる部分もある為、注意深く見守ってゆく必要がある[16]。この動きについて研究を行う際には、サンパウロ人文科学研究所所蔵の、1980 年代の楡木氏の日記が重要な資料となるであろう[17]。

最後に、楡木氏のインディオに対する関心の根源についても、興味深い考察が出来るのではないかと考えられる。楡木氏の同時代人であり、戦前に邦字紙の聖州新報を主宰していた香山六郎は、戦後になるとブラジル先住民言語の一つであるツピ語と日本語が同源であるという独自の研究を行っている（香山 1951；1970；1976）[18]。日本人移民の大衆芸能を研究する細川周平は、香山氏の研究を「ブラジルの正式な国民のメンバーとは見なされていない日本人が、実はヨーロッパ人よりも先に住む部族の兄弟であるという政治的含み」（細川 2008：x）を持つ論として解釈している。細川氏は、第二次大戦後の勝ち負け抗争によって、日系人の生活基盤や価値体系が混乱に見舞われる中、いつ排日運動がぶり返すか分からない社会的・民族的な緊張下でなされた香山氏の研究について「「日本ツピ同祖論」は「起源においては日本人だが、ブラジル社会の一員であることを両立させる起死回生の神話」」（同書：261）であったと位置づけている。但し、細川氏は同時に「香山の呼びかけは彼の共同体の外にはまったく響かなかったし、その内部でも一部の言葉好きの奇想と見なされるに留まった」（同書：288）としており、香山氏の論は日系社会に影響をほとんど与えなかったとしている。

その資料群の一定の割合をインディオ関連資料として割いていたことから、インディオにかなりの関心を抱いていたと考えられる楡木氏であるが、その関心が香山論に類するものであったのか否かははっきりとしない。しかしながら、国会図書館所蔵のインディオ関連資料はそのほぼ全てが戦後の記事のスクラップであり、楡木氏がインディオへの関心を示し始めた時期と、香山氏がツピ語の研究を始めた時期とが奇妙な一致を見せていること、また国会図書館所蔵分の楡木資料内のインディオ関連スクラップの表紙には「不出」と但し書きがされていること（香山氏の説はブラジルへの同化方向のものであり、負け組寄りのものといえる）から、ある程度香山論について意識していたのではないかと類推することは可能である。

香山論と楡木氏との関連性はさておいても、当時の移民知識人層が揃ってインディオへの関心を見せていたことには、何かしらの意味があると考えられる。当時の日本人移民にとってのインディオの存在意義について考える上でも、楡木資料は一定の価値を有するといえる。

16　最近の邦字紙における外山氏連載に関心を示した産経新聞は、2014 年 6 月 15 日付けでブラジル日系移民史見直しに関するニュースを配信している。同ニュースでは、「地球の反対側で続く「もう一つの歴史認識問題」は戦後 69 年目の現在も終わっていない」として、ブラジル日系移民史再認識と日本の戦後史認識問題とを関連付けている（産経ニュース 2014 年 6 月 15 日）。

17　勝ち組による移民史の見直しに関する近年の様々な動きについては、ピエール・ノラによる「記憶の場」（ノラ 2002）を参考にすることで新たな視点が獲得できるかもしれない。

18　ブラジルにおいて日本人と先住民の同源性を示唆したのは香山氏のみではない。日本人移民を支持したブルーノ・ロボ氏は、ブラジル人の中にはインディオを通して蒙古人の血が混ざっているので、日本人との間に偏見のない関係が出来ていると述べている（レッサー 2006：85）。

5．むすびにかえて

2014年の終戦記念日とその翌日に放送されたNHKBS『遠い祖国～ブラジル日系人抗争の真実』は、「真実」と銘を打ちつつも、近年の日本の右傾的思想を念頭に、勝ち組寄りの方向付けがなされているようにみえた。また、最近の日本国内における一部の文芸作品では、文脈を無視した勝ち負け抗争の引用が散見される[19]。こうした偏った見方への警鐘を促すためにも、同抗争に関する資料は保存、そして活用されるべきであろう。様々な可能性を見せる楡木久一資料への、今後の更なる研究が期待される。

参考文献

泉靖一（編著）『移民　ブラジル移民の実態調査』古今書院、1957年。
猪股嘉雄（著）、玉井禮一郎（監修）『空白のブラジル移民史』たまいらぼ、1985年。
江口航「勝ち組残党健在なり　ブラジル辺境に挑む「明治の魂」を描く」『日本及日本人』政教社、1968年7月号。
大城立裕「ブラジルの“勝ち組”」『現代の眼』現代評論社、1974年6月号、108～115頁。
太田恒夫『「日本は降伏していない」ブラジル日系人社会を揺るがせた十年抗争』文芸春秋、1995年。
輝社『輝號』創刊号、1948年3月。
小出孝「きけ「勝ち組」のこえ！！」『オール読物』文芸春秋、1951年8月号、148～152頁。
香山六郎『ツピ単語集』帝国書院、1951年。
———『ツピイ音語ニエムの語原意味で人類音語構成一音一音を意味感性研究』東京書店、1970年。
———『香山六郎回想録』サンパウロ人文科学研究所、1976年。
小林よしのり「日系ブラジル人「勝ち組」が信じたい情報」『開戦前夜　ゴーマニズム宣言RISING』幻冬舎、2013年、37～85頁。
斎藤広志『ブラジルの日本人』丸善株式会社、1960年。
佐藤早苗「ブラジル「勝ち組」50年目の真実　一、隠蔽された“恥部”」『正論』扶桑社、1998a年10月号、120～131頁。
———「ブラジル「勝ち組」50年目の真実　二、弾圧」『正論』扶桑社、1998b年11月号、168～178頁。
———「ブラジル「勝ち組」50年目の真実　三、逆境の中で」『正論』扶桑社、1998c年12月号、124～134頁。
———「ブラジル「勝ち組」50年目の真実　四、「勝ち組」生存者の悲劇」『正論』扶桑社、1999a年1月号、134～144頁。
———「ブラジル「勝ち組」50年目の真実　最終回　円売り事件」『正論』扶桑社、1999b年2月号、134～144頁。
週刊文春「ブラジル“勝ち組”ニッポン日記」『週刊文春』文芸春秋、1973年10月号、30～33頁。
臣道連盟『臣道』創刊号、1946年1月。
臣道連盟リンス支部『リンス週報』第一號、1945年11月25日。

---

[19] 例えば、政治的発言を漫画の形で発信している小林よしのりは、勝ち負け抗争について、引用元（太田 前掲書；高木 前掲書；藤崎 前掲書）の情報を一部省略しつつ漫画化した上で、同抗争の背景について何の裏付けもなく従来の諸解釈を否定し、その上で自身の主張を展開している（小林 2013）。

諏訪三男「勝ち組、負け組抗争を通じたブラジル日本人移民の心性の変遷について―新しい精神の形成を求めて―」『社学研論集』早稲田大学大学院社会科学研究科、2010 年 9 月、63～73 頁。

醍醐麻沙夫『南半球のザ・ジャパニーズ　ブラジルにおける日本人の適応』文芸春秋、1981 年。

高木俊朗『狂信』朝日出版社、1970 年。

玉井禮一郎（編著）、猪股嘉雄（協力）『拝啓　ブラジル大統領閣下！！　祖国愛を裁いた「勝ち組」事件の解決を』たまいらぼ、1984 年。

田宮虎彦『ブラジルの日本人』朝日出版社、1975 年。

外山脩『ブラジル日系社会　百年の水流―日本外に日本人とその子孫の歴史を創った先人たちの軌跡―』トッパン・プレス印刷出版有限会社、2006 年。

ノラ、ピエール（編）（谷川稔訳）『記憶の場』全 3 巻、岩波書店、2002 年。

半田知雄『移民の生活の歴史　ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所、1970 年。

比嘉栄一「勝ち組の浦島太郎といわれて―平和な日本に帰国して「やっぱり勝ったんだ」と確信しました」『文芸春秋』文芸春秋、1974 年 2 月号、132～142 頁。

藤崎康夫『陛下は生きておられた！　ブラジル勝ち組の記録』新人物往来社、1974 年。

ブラジル日本移民 70 年史編さん委員会『ブラジル日本移民 70 年史』ブラジル日本文化協会、1980 年。

ブラジル日本移民 80 年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会移民 80 年祭祭典委員会、1991 年。

ブラジル日本移民百周年記念協会『ブラジル日本移民百年史　第三巻』風響社、2010 年。

星野豊作『明るいコロニアを考える会シリーズ①　拓魂 100 年　ブラジル激動の日本人移民史』秀作社出版株式会社、1990 年。

細川周平『遠きにありてつくるもの　日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房、2008 年。

前山隆『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会、1982 年。

―――『エスニシティとブラジル日系人―文化人類学的研究―』御茶の水書房、1996 年。

三田千代子「ブラジルに於ける戦前日本人社会の社会制度と文化目標の矛盾：勝負抗争の社会的背景」『ラテン・アメリカ論集』ラテン・アメリカ政経学会、11-12、1978 年、38～65 頁。

―――『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ―ブラジル移民 100 年にみる人と文化のダイナミズム』不二出版株式会社、2009 年。

宮尾進『臣道聯盟　移民空白時代と同胞社会の混乱　―臣道聯盟事件を中心に―』サンパウロ人文科学研究所、2003 年。

三山喬『日本から一番遠いニッポン　南米同胞百年目の消息』東海大学出版会、2008 年。

レッサー、ジェフリー（小澤智子訳）「ハイフンを探して――ブラジル国民としてのアイデンティティをめぐる苦闘と日系人」レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キクムラ＝ヤノ、ジェイムズ・A・ヒラバヤシ編『日系人とグローバリゼーション　北米、南米、日本』人文書院、2006 年、81～111 頁。

Fernandes, Alexandre, *A Verdade sôbre a Shindo Renmei*, n.p., São Paulo, 1949.

Kumasaka, Yorihiko e Hiroshi Saito, “Kachigumi : uma delusão coletiva entre os japoneses e seus descendentes no Brasil” in : Saito, Hiroshi ; Maeyama, Takashi（org.）. *Assimilação e integração dos japoneses no Brasil*, São Paulo/Rio de Janeiro, Edusp/Vozes, 1973.

Miranda, Mario Botelho de, *Shindo Renmei - Teirorismo e Extersão*, Saraiva, São Paulo, 1948.

Morais, Fernando, *Corações Sujos - A história da Shindo Renmei'*, Companhia das Letras, São Paulo, 2000.

Nakadate, Jouji, *O Japão venceu os Aliados na Segunda Guerra Mundial? O movimento social "Shindô-Renmei（1945/1949）"*, PUC-SP, São Paulo, 1988.

Shintani, Alberto Hikaru, *World War II as Seen in Life Records of Japanese in Brazil : A Study of Diaries, Newspapers and Radio Broadcasting*, Kyoto University, 2013.

Willems, Emilio e Hiroshi Saito, "Shindo Renmei : Um Problema de Aculturasão", *Sociologia*, Vol.IX, No.2, 1947, pp.132-152.

インターネット参考資料

国立国会図書館、憲政資料室、日系移民関連資料、楡木久一関係資料ホームページ。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/NirekiHisaichi.php）

産経ニュース「【『深・裏・斜』読み】世界最大 150 万人、ブラジルの日系社会　移民史問い直す試み続く」2014 年 6 月 15 日。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //www.sankei.com/life/print/140615/lif 1406150009-c.html）

ニッケイ新聞「戦前戦中の移民史に光当てる＝真相究明委員会謝罪の背景＝（下）＝次は法務省に持ち込みたい＝父の無念の想い胸に行動」2014 年 3 月 21 日、Web 版。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //www.nikkeyshimbun.jp/2014/140321-72 colonia.html）

日高徳一「臣道連盟青年部、最後の決行員・日高徳一が語る」ブラジル日和（インターネットラジオ）、2011 年 12 月 15 日。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //www.100 nen.com.br/ja/radio/000215/20111228007845.cfm）

松本善方「ある勝ち組の告白」ブラジル日和（インターネットラジオ）、2006 年 1 月 12 日。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //www.100 nen.com.br/ja/radio/000130/20060117001577.cfm）

丸山昌彦「丸山翁から見た円売り事件と音楽」ブラジル日和（インターネットラジオ）、2006 年 10 月 14 日。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //www.100 nen.com.br/ja/radio/000130/20061019002307.cfm）

山下博美「勝ち組『決行員』の記録」ブラジル日和（インターネットラジオ）、2008 年 8 月 16 日。（2015 年 11 月 21 日アクセス）
（http : //www.100 nen.com.br/ja/radio/000174/20080917004795.cfm）

録音資料

国立国会図書館憲政資料室所蔵（日系移民関連資料）『座談会　いわゆる「勝組」「負組」の実相と移民関係』（VE 701-106）

巻末資料 1　国立国会図書館所蔵の楡木久一氏蒐集資料について

2014 年 12 月～2015 年 2 月の間、国立国会図書館四階憲政資料室にて断続的に約一週間調査

「楡木久一関係資料」国立国会図書館憲政資料室所蔵

目次

Ⅰ．1-21　日誌

昭和 13 年 11 月 3 日から 1964 年 12 月 31 日までのもの

・戦争情報

（昭和 13 年 11 月 3 日～昭和 16 年 8 月 30 日）

・邦字紙禁止、ポルトガル語紙やアルゼンチン邦字紙から情報

（昭和 16 年 9 月 1 日～昭和 17 年 11 月 24 日）

…デマニュースに関する書き込みあり（後から編集したしるし）

・ポルトガル語紙、デマニュースばかり

（昭和 18 年 10 月～昭和 19 年 10 月 14 日）

・終戦直後の日本敗戦情報到達における邦人社会の動揺と、勝ち組的思考の端緒について

（昭和 19 年 10 月～昭和 20 年 8 月）

・偽ニュース沢山、勝ち負け抗争について

（昭和 20 年 9 月 1 日～昭和 21 年 2 月 28 日）

・日本の敗戦認識済み、アマゾン等、戦後移民再開

（昭和 28 年）

Ⅱ．22-28　書類

勝ち負け抗争関連の記録、また日本の政治や皇室情報について

・アンシエッタ島入獄者名簿

（昭和 22 年 3 月）

・信念派（勝ち組の別称）によるマニフェスト文

（昭和 26 年）

…母国に「共産党あるいは不良従輩」と誤伝されていることが遺憾、と書き込みあり

・終戦 5 年目の信念派マニュフェスト

（1950 年 1 月 9 日）

Ⅲ．29-102　新聞切り抜きノート

勝ち負け抗争関連記事、戦況、日本やブラジルの諸記事

Ⅳ．103-109　雑誌切抜き

戦争関連、「土人ニュース」（Manchete, Cruzeiro 等、ほとんどが戦後の記事）

Ⅴ．110-131　新聞原紙の抜取り保存（大型）

戦争関連、円売り事件関連、インディオ関連

巻末資料 2　サンパウロ人文科学研究所所蔵の楡木久一資料について

2014 年 11 月 1 日～11 月 30 日の一か月間、ブラジルのサンパウロ人文科学研究所にて調査

「楡木久一資料（仮）」サンパウロ人文科学研究所所蔵

日誌

「1962～1963 年」

円売り事件に関する書き込みあり

「1964 年度日誌」

中身は未確認（国会図書館所蔵の同年度日誌の複製か）

「古物売却日誌　1967 年貼、1964 年 1 月」

臣道連盟に関する資料を売却したことへの後悔について「廿年後の残念である」と表紙に記述

「1971 年日誌」

中身は未確認

「1972 年日誌」

中身は未確認

「1973 年日誌」

中身は未確認

「1974 年日誌」

中身は未確認

「仕事日誌　1971 年～1975 年迄」

中身は未確認

「仕事日誌　1976 年～1981 年迄」

国会図書館への資料売却が成立したため、ある顧客との取引を中止した、との記述あり

「1978 年日誌」

中身は未確認

「1980 年日誌」

中身は未確認

「1981 年日誌」

国会図書館への資料売却、また前山隆氏とのやり取りについて

「1982 年日誌」

中身は未確認

「1983～1984 年日誌」

中身は未確認

冊子・ノート等

「1945 年 8 月 15 日以降　デマニュース集」

「冊子（1956）」

戦前から戦後暫くまでの歴史年表と、14 歳からの読書履歴について

「冊子（1979 年 2 月 27 日）」

私の蒐集（1976 年～1980 年 12 月）前史の終焉、価値観の変貌、常識変貌、終末の時代

「ノート（1983 年 5 月）」
　「「勝ち負け事件と記事　日本移民史 70 年史」を嗤う」
「ノート（1985 年か）」
　「八月の終戦四十年　サンベンナルド　楡木久一」「一．國破れても勝組を心に組んで四十年を過ぎたり。」「二．八月六日の日を迎へた私の原爆碑に四十年目の涙が流れる」「三．國も山河も破れはてた終戦日本を今日思へぬ」
「勝ち負け事件のノート（1985 年 5 月）」
　円買事件、テロ等に関する資料、泉靖一氏講演報告等、書き込み多数あり
「ノート」
　資料リスト No.1-2、写真リスト No.8（楡木氏蒐集資料の一部目録か）
「冊子」
　間宮老の遺稿「連邦最高裁判所長官オロジンボ　ノナト閣下宛」臣道連盟同胞に対する処遇への対処と謝罪要求」
「袋」
　国会図書館への楡木資料売却に関するいざこざについて

手紙
「手紙（1982 年 4 月 1 日）」
　国会図書館へ日記等を売却した等の記述あり
「玉井氏へ宛てた楡木氏の手紙」
「手紙（1986 年 3 月 8 日）」
　楡木氏から国会図書館宛、勝ち組資料の重要性を唱える
「手紙（1986 年 4 月 5 日）」
　国会図書館から楡木氏へ、資料購入に関する御礼の手紙。未収資料がないか問い合わせあり
「東京銀行のレシート」
　資料売却代金、売却に関する委任状二通

目録等
「資料金入手に就て」
　リストに『東洋の拓人』二冊
「名簿（1947 年）」
　負勝事件、入獄者名簿
「リスト」
　鈴木不二男氏の編集作成による「楡木氏所蔵資料リスト二号」

書籍
　アゴスチンニョ・ロドリーゲス・フィーリョ『東洋の拓人』（複写、二冊）

※本論文は、2014 年度東洋大学井上円了記念研究助成採択課題「サンパウロにおける勝ち組負け組抗争の再検討～歴史的資料の整理と分析～」（研究代表者：紀葉子）の研究協力者として行った調査に基づくものである。

【Abstract】

A Study on the Significance of the Hisaichi Nireki Documents Based on Hisaichi Nireki's Recent Documents at a Center for Japanese Brazilian Studies

Naohiro NAGAO*

The purpose of this study is to classify Hisaichi Nireki's documents and to discuss an importance of those documents for Japanese Brazilian studies. At first, a survey of Japanese immigrants to Brazil is offered and some previous studies about the *Shindō Renmei* conflict during the 1940s. Then the Hisaichi Nireki Documents belonging to the National Diet Library and a Center for Japanese-Brazilian Studies are classified. Hisaichi Nireki documents shed light on the history of Japanese immigrants to Brazil before World War II. Those documents also highlight relations between Japanese immigrants and Brazilian natives and political conflicts within the Japanese community.

Keywords : Hisaichi Nireki, Japanese immigrants, Brazilian-Japanese relations, Nikkei, the *Shindō Renmei* conflict

本論文は、サンパウロ人文科学研究所にその一部分の所蔵が新たに判明した楡木久一（にれき・ひさいち）氏蒐集資料の分類、及び同氏資料のブラジル日系移民研究における重要性の考察を目的とするものである。本稿では、ブラジル日系移民史の概観、第二次世界大戦終了後における邦人社会内の勝ち負け抗争についての先行研究レビューを踏まえた上で、楡木氏資料の同抗争関連資料としての価値に注目し、国立国会図書館所蔵分とサンパウロ人文科学研究所所蔵分の同資料の分類を行った。国立国会図書館には、戦前から 1960 年代前半までの同氏の日誌が所蔵されているが、サンパウロ人文科学研究所所蔵の同氏資料からは、その続きである 1980 年代までの日誌が見つかった。これらを検討した結果、勝ち組戦前移民のライフヒストリー、勝ち組による移民史再認識運動、日本人移民とインディオとの関連性という三点にて、ブラジル日系移民研究における楡木資料群の有用性が確認された。

キーワード：ブラジル、日系、移民、勝ち負け抗争、楡木久一

＊ A visiting member of the Institute of Human Sciences at Toyo University